

# 忘れない・伝える・続ける・つながる いわて生協 コープ・ボランティアセンター (CVC) 「バスボラ」の取り組み

文：いわて生協 CVC 事務局 かねことしあき 金子敏明



源水川の「イトヨ再生プロジェクト」。深い所では、胸まで川に入ってヘドロをかき出しました。

## 「今、何とかしなくては」とバスボラを開始

いわて生協では、被災直後から4月初旬まで炊き出しや移動販売を続けました。被災地の様子は本当に地獄のようなありさまでしたが、こんな中で、遠くから、全国から駆け付けてくださる仲間・生協という組織の力に励まされたものです。

被災地の惨状を目の当たりにし、「今、何とかしなければ」という気持ちと、生協でもボランティアのためのバスを出そうという声に押されスタートしたのがCVCによる「バスボラ」です。

6月から労働組合と共催で続け、12月11日までに50回、延べ1,800人を超す参加をいただき、被災地支援を続けています。津波被害の大きかった被災地は盛岡から100km余と遠く、バスで3時間近く要するため、日帰りバスボラの半分は往復の移動時間です。現地では全国各地からのボランティアの皆さんにも「遠くからありがとう」とお礼を伝え、励まし合いながら活動しました。CVCバスボラには、県外からはもちろん、米国在住日系3世の高校生や、全国の労働組合の皆さんにもご参加いただきました。本当にありがとうございました。

バスボラは、スタート当初はおおつち大槌町へ行っていました。初めのころは津波で被災した個人宅のがれきの撤去などが主な支援作業でした。その後は田畑や道路の側溝のがれき整理・泥出し、そして周辺環境整備へと移っていきます。

大槌町での環境整備では、①大槌川の河原のがれきを撤

去し、再び鮭が遡上する川に戻す「鮭プロジェクト」②河原に菜の花を植え、心和む風景を取り戻す「菜の花プロジェクト」③源水川のヘドロをかき出し、岩手県の絶滅危惧種に指定されている小魚イトヨを保存する「イトヨ再生プロジェクト」などに携わりました。

## 仮設住宅の人たちが「憩える場」を

初めて参加された方は今でも、「TVで見るのと、自分の目で見るのとは全く違う。まだまだ支援は必要」と異口同音に言われます。「自分の目で見、感じた事を“忘れない”で、ぜひ周りの人にあなたの言葉で“伝えて”、バスボラ以外でもできる支援を“続けて”、一番大切な人と人の“つながり”を大切に」とバスボラでは呼びかけています。

9月後半からは、県内で一番被災面積が広い陸前高田市へ。仮設住宅で何もすることがないお年寄りがたくさんいて、「畑を作りたい」という要望があり、がれきを撤去し、津波で運ばれた土が層になった地面を掘り起こしました。石やガラス破片などを分別し、畑ができるようにしました。こうした様子を見ていた被災者の方から、「自分の土地にグラウンドゴルフ場を造り、仮設住宅に引きこもり気味の皆さんが外で交流できる場にしたい」という要望が出ました。ボランティアの皆さんと一緒に完成させた「みんなのふれあい広場」は、ゲートボール場や希望の花が咲きそろう花壇、腰を落ち着けて休めるベンチもすべて手作りです。

被災者の皆さんが、復興に向けて一歩を踏み出す支援につながればという思いを、ボランティアの仲間たちと一緒に感じながら、冬を迎えています。「この冬を乗り越え、春の

息吹を、前を向いて感じられたらいいな！」との思いを乗せて、ボラバスは陸前高田に向け、明日も朝6時半出発です。



大槌河原の「菜の花プロジェクト」。菜の花の種まきの様子。